原始佛教に於ける業に就て

―吠陀より阿含・尼柯耶に至る意義の一考―

佐藤宏賢

(一) 序
(二) 「業」の意義に就いて
(三) 奥義書以前の業説
(四) 奥義書時代の業説
(五) 原始仏教の業説
　(1) 縁起との関係
　(2) 結論
(六) 註〔参照文献〕

(一) 序

小論は卒業論文の要旨である。紙数の短縮から引用文を割愛せねばならない。依つて概略の羅列となつている。各註の説明は参考文献の参照をもつて補なわせて戴きたい。

一般に仏教は厭世観と見なされているが、仏陀が説教された業思想の本旨は一体どんなものかと云う疑問を解く事により、宿業的な厭世観の本体が解く一方法だと思う。仏教は、単なる厭世観でなく、人間の心の自由を認めた宗教と言われるが、それは、人間の努力精進を非常に高く評価している所から導かれた思想であろう。そこで、仏陀以前から考えられていた業思想を明るみに出す事に依って、原始仏教の業思想の特異性を詳察して行くものである。

(二) 「業」の意義について

「業」とは梵語 *Karman* の訳であり、「羯磨」を指す。大毘婆沙論には、「業」の原義「造ること」の用法を

①「問何故名業。業有何義。答由三義故説名為業。一作用故。二持法式故。三分別果故。作用故者謂即作用説名為業。持法式者謂能任持七象法式。分別果者謂能分別愛非愛果。」

以上の三義を提出している。

先づ第一義の「作す事（*Kāritra*）」を「業」と言う場合に就いてであるが、これは仏教の説く「業」でなく、②数論（*Sāṁkhya*）派の二十五諦の中の五作根（*Pañca Karmendriyāṇi*）の業、或ひは、③勝論（*Vaiśeṣika*）派の六句義中の業句義に於ける業等の意味である。数論派の説く五作根の例を取って示すと、それは五業根の意で、手、足、口、大小便道を言い、これ

らの器官に依って為される手の把捉、足の歩行、口の発語、大小便道の排泄、生殖等の作用がすべて業とせられている。所謂、単なる作用、動作を意味するに過ぎない。

第二義の「業」とは、「七衆の法式を住持するもの」とあるが、七衆とは、仏教々団を構成する所の比丘、比丘尼、沙弥、沙弥尼、式叉摩那、優婆塞、優婆夷を指すから、これら七衆に於ける儀式、作法としての「業」を指す。故に、通常業報説の業と混同されない様に普通「業」と訳さないで、原音のまま「羯磨」と言っている。

印度一般でも仏教以前から存した考え方であって ④ Brāhmana や Karma-Kānda-Mīmāmsā 派で用いられる祭式がそれである。此等の派の祭式儀礼の実践方面が Karma-Kānda と呼ばれている。要するに第二の用法の業は、単なる動作と言う意味でなく型にはまった動作、規定された、法式化された動作を意味する。

第三義の「業」は、所謂以後論じつくさんとする意味の「業」であって、可愛と不可愛との果報（異熟）即ち、楽果と苦果とを招く所の、意志に依る行為的生活を指す意味を有するのである。大毘婆沙論に「能分別愛非愛果」と言われる如く単なる動作や儀式でなく、好悪の結果を招くものとしての善悪の動作を指す言わば我々の行為動作の中で、倫理道徳的又は宗教的な価値を有するものであって、それはその報果と関係せしめて意味付けられる性質のものである。故に仏教に於けるは此の意味でのものであり必ず業報説となるべき性質のものである。そこで、業の因果関係が如何なるものであるかを考察する必要上業思想の発生を検討せねばならない。

(三) 奥義書以前の業説

印度思想史上最古の聖典として知られる四吠陀、利俱吠陀(Ṛgveda)、夜柔吠陀(Yajurveda)沙摩吠陀(Sāmaveda)阿闥婆吠陀(Atharvaveda)の中から業思想の先駆となる様なものを取り上げると、死後未来に関して記せられている讃歌がある。⑤ 敵に対する呪咀、未来生活に対する詩歌は葬送の歌として述べられている。

「父祖に会せよ、夜摩に会せよ、最高の天に於て所願の成就に会せよ、不善を離れて再び家郷に帰れ、生気に満ちて新見に会せよ」

この例等より判断するに末世の存在は記せられているけれども何が再生するかについてはいささかも述べてをらず ⑥ 後代問題視さる輪廻観は此所に発見出来ない。

(四) 奥義書時代の業説

業に依る輪廻説は梵書時代の終りから起ったのである。それは、奥義書に発達した常我論と相まって完成した。アートマンは常住と言うのが常我論であるから、生物が息を止め死滅しても何みかに肉体の依拠処を求めねばならぬと言うのである。業思想はここに輪廻説と結合して完成されたと見られるのである。同一本体の我が人間、動物等の種々の境に分れるのは業による移生に外ならぬと説き、その業の勢力を物質視したのが耆那教であるが、輪廻思想の根底に横たわる業説を哲学的意義付けしたのが、奥義書に出てくる ⑦ Yājñavalkya 等である。奥

義書時代の業説発展をさぐると当時より個人意識が発達して業感が理論化され深く認識されたのである。要約すれば、

(1) 心理的要求から行為者に何等かの形でその未来に影響を与えると考えた。

(2) 道徳的、倫理的要求から生れた自業自得感の強調。

以上の様な要求から行為の主体、即ち責任者を求め、現在、未来、過去に渡って受ける事項を問題点となったのである。

(五) 原始仏教の業説

前述の如き考察に従がえば業に依る輪廻説は決して仏教に起源を置くものでなく梵書時代の後期から奥義書に到って常我論と相俟って完成されたものと考えられる。

原始仏教の場合業に対する認識は普通、穏当な常識説として、努力、精進を尊重する立て前から仏教に入るための必要條件として認識されている。業報説の認識を仏教々義の初歩的入門の不可欠のものとした事が認められる。婆沙論にも、

⑧「問、此正法中亦説所受若楽過去業為因、而非悪見。彼外道亦作是説、何故名悪見耶。答、此正法中説、現所受有以過去業為因、有是現在士用果者。彼説一切皆以過去所作業為因、不説現在有士用果。故名悪見」

とあり、現在生活の境遇の原因は、過去世の為せし業果として決定されているが、ただそれのみでなく、今生の努力（士用）による前趣の運命余地は認めると言うのであるが、この有部

的業認識は原始仏教の業論を正当に受けついでをらないのである。
仏陀の業認識を詳察すれば、人間として理想を高く掲げ、只管その理想郷たるものの実現に向い前進する理想主義、精進主義的な態度を認めるものでなければならないからである。仏陀は、⑨「自分は精進論者である」という意味の事を説いてをられる所以である。仏陀の業認識は、奥義書等の心理的要求、倫理的要求と同様要素を含んでいるけれども際立つた特異性は、縁起説による努力、精進の必要性を説いて、単なる心理的、倫理的要請に応じんが為の業認識ではない。

(1)

⑩「縁起は此れ有るが故に彼有り、此れ生ずるが故に彼生ず」と一般に定義され、その原意は決して諸法の生起する、その生起の過程を説くのが目的でなく、諸法は因縁に縁り生起したものであると読める。その立場が縁起説である。端的に言えば、「成り立つている事」その姿である。そこで仏陀の業思想を正しく理解する為には、阿含、尼柯耶の根本理法たる縁起説との関連性を知らねばならぬ。前述の婆沙論は縁起を充分理解して居らない故に輪廻説の観点から三世実有の宿命論を含ませ、その外で意志の自由、従がつて人間の努力を説いた。原始仏教では⑪輪廻説を認めず、自己に与えられた苦楽を心の持ち方として、それに問題づけたのである。
換言すれば、常我論の立場の業論は、「業とは所詮、固定した生命の外辺に附着して、それを種々の處に運搬する原動力を示し、⑫原始仏教では、絶えず変化し乍ら、過去の経験を自己に収めて、その原動力として創造的進化するものとする。

(2)

紙数の制限上結論を急ぎ、⑬縁起に縁る業思想を述べねばならない。

阿毘曇教学では、十二縁起の第二支「行」が「業」を意味するとしている。行は知的情意的の両面を含んでの識の活動を言う。しかも識の活動は触、受、想、思から始まり、その活動の様相も決して一定していない。有情の生活そのものが識の活動である。日常茶飯事の一挙手、一投足すべて識の働きに依らないものはない。この意味に於いて、行は即ち業であり、業は行為的生活である。行の原語は、Saṃskāra, Saṅkhāra であって、sam + √kṛ の合成語、直接的には、「集め造る事」「集め造る者」を意味し、今の「業」を意味する。「集める」とは、因縁を和合する事で凡ゆるものは、種々因縁が和合して仮りにその様なものとして成立しているのであるから、その様に凡ゆるものを因縁和合して成立させるもの、縁起せしめる原動力が業である。そして又、業は「心」を内容づけるものであって、その故に、業とは「意志による身心の行為的生活」或いは「意志による心の行為的活動」と言われる所以がここに存し、原始仏教に言われる業とは、意志の習慣づけられた性格を指すものと考えるのである。業とは、「生命に依附する一種の力ではなく、寧ろ生命が自己創造を営む時の内的規定に外ならぬ」と解するは至当と言える。

「註」

⑬ 大毘婆沙論巻三、大正二七・五八七・B

② 宇井伯壽著　印度哲学史　一九四頁以下参照

③ 〃　一七六頁　〃

④ 〃　一六五頁　〃

⑤ 印度古聖歌、九一頁、以下参考にせられよ。

⑥ 輪廻に就いては木村泰賢著、印度哲学宗教史、二七六頁以下に詳述
マヌ法典にも輪廻は説かれている。中野義照マヌ法典註…三四一頁

⑦ 「人死するや語は火に呼吸は風に眼は太陽に意は月に耳は方に身は地に心は空に毛は草に髪は木に血と液とは水に行く、然らばいづこに残存するか」
「業とは根に依って行動しつつ「我行動を為す」と言へる。内心の基底より為されたる行為即ちこれ業なり」 *Nirālamba-Upanisad*（二七〇頁）
他に詳しくは、木村氏印度哲学宗教史二八七頁以下参照

⑧ 大正二七、九九三a　婆沙論、一九八

⑨ 南伝蔵経第十七巻、増支部第七発精進等品、十七頁以下

⑩ 大正、二、三五八、又は南伝蔵経、相応部第十三巻、全体

⑪ ⑨の全体

⑫ 大正二　雑阿含経　三三五c
「一切衆生類　有命終帰死　各随業所趣　善悪果自受　悪業堕地獄　為善上昇天
修習勝妙道　漏盡般涅槃　如来及縁覚　仏声聞弟子　会当捨身命　何況俗凡夫」
等からも伺える。

⒀ 大正一 四四八頁c（別訳雑阿含経巻十二）

一例を挙げて縁起と業の関係を見る。

「仁者当説，須達答言。如我所見。一切衆生悉是有為．従諸因縁和合而有。言因縁者．即是業也，若仮因縁和合有者，即是無常。無常即苦，苦即無我，以是義故，我於諸見，心無染着，如諸外道，作如是言，一切諸法常，唯此為実，余皆妄語，如此計者」

その他主な参考文献

印度古代精神史 金倉円照著、 印度哲学宗教史 木村泰賢著、 業の研究 舟橋一哉著

業思想序説 舟橋一哉著 原始仏教思想の研究 舟橋一哉著

原始仏教の実践哲学、和辻哲郎著、 耆那教聖典 世界聖典全集、